

学位の種類 博士(文学)  
学位記番号 文 第 79 号  
学位授与年月日 平成5年3月24日  
学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学位論文題目 讃岐典侍日記の研究

論文審査委員 (主査)

教授 菊田 茂 男 教授 加藤 正 信  
教授 鈴木 則 郎  
教授 仁平 道 明

## 論文内容の要旨

### 讃岐典侍日記の研究 目次

#### 序論 研究の課題と方法

##### 第1節 研究史の展望

##### 第2節 研究の方法

#### 第1篇 『讃岐典侍日記』の特質

##### 第1章 『讃岐典侍日記』の成立と方法

##### 第2章 『讃岐典侍日記』の主題

##### 第3章 『讃岐典侍日記』の構造

##### 第4章 『讃岐典侍日記』の人物像

##### 第5章 『讃岐典侍日記』の表現——上巻を中心として——

##### 第6章 『讃岐典侍日記』の表現——下巻を中心として——

##### 第7章 『讃岐典侍日記』下巻5節の一段をめぐって

#### 第2篇 『讃岐典侍日記』の諸相

##### 第1章 『讃岐典侍日記』における心情語

- 第2章 『讃岐典侍日記』に描かれた愛と死
- 第3章 『讃岐典侍日記』の対読者意識
- 第4章 『讃岐典侍日記』上・下巻における「われ」の位相
- 第5章 『讃岐典侍日記』における和歌の役割

## 結 論

- 第1節 平安朝女流日記における『讃岐典侍日記』の位相
- 第2節 今後の研究課題

## 序 論 研究の課題と方法

### 第1節 研究史の展望

#### 1. 伝本（諸本）の研究

諸伝本は、上巻本系、上下巻本秘書郎本系、上下巻本鹿島神宮本系の三系統に大別できる。

#### 2. 成立に関する研究

成立に関しては、『讃岐典侍日記』研究の先導的役割を果たした玉井幸助氏の三巻説（下巻末散佚説）、玉井氏の三巻説を受け、作者の覚書・手記を想定した今井源衛氏の二段階成立説などがまぎらげられよう。それに対して、森田兼吉氏は、上巻執筆の材料としての覚書の存在を否定し、執筆時期についても嘉承2年10月以後だと述べる。しかし、森田氏の下巻に関する「回想」と「和歌」の問題については承服できない点がある。宮崎荘平氏説は、初めから読者を想定せずに執筆した自照文学の代表作として捉える点に特色がある。守屋省吾氏は、長子が堀河天皇の皇子を生むことを希求していたことが成立に大きくかかわっていたとする。

#### 3. 作者に関する研究

ほぼ定説となっている藤原顕綱の女長子説を、二条院讃岐説、伊予三位藤原兼子説と対比することによって再検討して補強した。

#### 4. 作品論的研究

『讃岐典侍日記』を文芸作品として初めて考察したのは池田亀鑑氏である。池田氏の提言による「死の文学」という捉え方は、一時期、『讃岐典侍日記』の代名詞ともなったほどであったが、その後、それに対する批判が提起され、池田説がすこしく客観性を欠くものであることが指摘された。次に今井源衛氏は作者藤原長子と堀河天皇との間に、恋愛関係、男女関係があったとする大胆な問題提示を行い、その後の本日記の作品論の主流を成すに至った。しかし、厳密には作者と天皇との間の具体的な関係の有無は決め難いと言わなければなるまい。

さて、石埜敬子氏の見解は見逃し難い。特に、下巻の回想を前期・中期・後期の三つの部分に分けてそれぞれの特色を説明し、そこから物語に近い性格を持つことを導き出したことは注目に値する。また、宮崎荘平氏の『平安女流日記文学の研究』は示唆的である。作者の自照を一貫とした主題として捉え、本日記を高く評価したところが後の研究に大きな影響を与えた。しかし、対読者意

識の問題については、その存在を否定する立場に立っているものの、その後の論考では揺れを見せている。作品論の研究史において、看過できないのは小谷野純一氏の『平安後期女流日記の研究』であろう。小谷野氏の指摘の中では、序の五月雨の虚構性、作者の内的秩序による時間表現、五節の回想における仮構の導入などが特筆されるべきである。小谷野氏の分析は、史料に基づき、いわゆる実証性を志向しているようだが、そのため複雑で分かりにくくなっているきらいもある。史実と文芸作品との相違についての基本的な問題も、今後に残されている。ともあれ、小谷野氏の論考に対する反響が見られない現段階では、本日記の作品論的研究はまだ十分とは言えないと思われる。

## 第2節 研究の方法

日記文芸と日記との違いを踏まえ、『讃岐典侍日記』を文芸作品として捉える立場から、本作品を文芸学的方法によって解明することを目的とする。

## 第1篇 『讃岐典侍日記』の特質

### 第1章 『讃岐典侍日記』の成立と方法

『讃岐典侍日記』の下巻末散佚説、中巻散佚説、二巻説を概観した後、序を除いた上巻の執筆契機と成立について考察した。上巻執筆の契機となったのは堀河天皇の崩御であることは間違いないが、天皇の病気の重さを察知し得なかったことに対する後悔の念が強く見えることなどから、作者に筆を執らしめた原動力は堀河天皇への敬愛の情と憐れみの念であったのではないか。堀河天皇の優しい性格からなされた振る舞いは、作者長子にとっては特別な意味を有したのであり、また、天皇でありながら冷遇されている様子を目のあたりにした長子は、一層献身的に看護しようと決意するに至る。それらが強く作者を動かしたことは容易に創造されよう。なお、覚書の有無についての客観的判断は困難である。

下巻の成立を考えるにあたり、日記文芸の自己救済性を確認しておく必要があると思われる。作者が『讃岐典侍日記』で最も書きたかったのは、自身と堀河天皇だけの世界であった。しかし、上巻ではその意図が達成されなかった。そこで再出仕は日記の下巻を執筆する契機となった。再出仕をめぐって長子の心情は微妙に揺れ動くが、長子は「故院の御時」と「今の御時」に大事にされていることを確かめることによって、故堀河天皇以外にはお仕えしないという気持ちを振り切る事となる。

以上の成立についての考察を踏まえて上・下巻の方法を見てみると、上巻は長子の堀河天皇の看取り記——それは、天皇の病態の変化を克明に記述すると同時に作者自身の姿も自然に浮かび上がってくるもの——となっている。下巻は、長子が鳥羽天皇に仕えながら亡き堀河天皇との昔の日々のことを思い起こして追懐する、いわゆる追慕記で、作者の視座は自己自身の身の上に移って来る。このように上・下巻の間では、作者の視点は異なるが、独特の時間表現により、全体が統一されていると思われる。上巻で日付があるのは5例だが、それは、読者に日記中の記述がすべて事実だと

信じさせたかったために記されたものと思われる。また、下巻の、第53段から第55段までの章段を除いた、嘉承2年(1107年)10月から翌年12月までの記述も同様の意図があったであろう。しかし、小さな行事や出来事などの日付や内容は、史実との間に少なからず齟齬があるようである。これは、日記の世界で自分と堀河天皇との恋愛を成就せしめるためであったからだと思われる。

## 第2章 『讃岐典侍日記』の主題

『讃岐典侍日記』の主題について考察した論文は、現在のところ2篇しか見当たらない。そのうち、増田繁夫氏の論文は、「忠誠」を主眼に据えて論じているが、これは甚だ疑問の多い説であるといわざるを得ない。

さて、『讃岐典侍日記』の序と末尾の章段は、日記執筆の動機や目的・意図などを探る上で注目される。序からは、堀河天皇との日々の思い出を書くという行為を通して、自身と堀河天皇との恋を再確認し、現在の「生」を獲得しようとしていたことが読み取れる。しかし、下巻の末尾の章段とを併せ読めば、そこからは作者の魂の不安と揺れが強く感じ取られよう。そしてそこに見られる読者の諒解を得ようとする表現行為は、読者からの誹謗を防ぐための装置であったことが理解される。

ところで、堀河天皇の臨終の際の描写には興味深いものがある。堀河天皇崩御の際の大式三位と藤三位の泣き狂う様子を描写した筆致からは、二人の女性に対する作者の劣等意識が感じられ。そして、「反省めいた」心情のあらわれは、実は愛情の不充足への反省が目的ではなく、下巻の執筆——堀河天皇との一体化、換言すれば堀河天皇との恋を達成する——を促したエネルギーを意味するものであった。作者の愛は、堀河天皇の崩御によって初めて達成できる性質の愛であったと言えるのであろう。

次に、再出仕——主題形成の過程について考察すると、再出仕を巡る叙述の部分に入ってから、主人公が天皇から作者に変わっていることに気付く。作者は、上巻において、自身と堀河天皇との二人だけの世界を構築しようとするが、天皇の崩御によってそれは現実的には不可能となる。しかし、再出仕に際し、読者への弁疏を試みた後、自身の重要性と再出仕の不可避性を確認することによって、自身と堀河天皇との恋の世界を、精神的磁場の中に構築することが可能となったのである。

下巻の再出仕をめぐる叙述の部分では、作者は「傍観者」としての位置に置かれているが、泉見物と扇引きとの回想を経て、五節の回想に至ると、作者は完全に当事者であり、しかもその世界は、第三者の介入を許さない堀河天皇とのたった二人の世界として現前する。以後の、押し出をする回想、里さがりの際の思い出もまた、完全に作者と堀河天皇との二人だけの世界である。このようにして、『讃岐典侍日記』の主題は形成され、そして完成されることになったのである。

## 第3章 『讃岐典侍日記』の構造

『讃岐典侍日記』は、『本朝書籍目録』に3巻とあるため伝本や成立に関して諸説が行われてい

るが、ここでは、一応現存の2巻を研究の対象とする。

まず、上巻の構造について考察してみると、表現・文体と作者の心境変化、あるいは記事内容などから、大きく4群に分けることができよう。第1群は、日本古典全集本の章段でいえば、日記全体の序の役割を果たしている第1段に相当する。第2群は、第2段から第16段までで、堀河天皇の発病から崩御に至る叙述である。第3群は、第17段から第22段までで、堀河天皇の危篤、崩御、そして崩御後の乳母たちの反応などを記す。第4群は、第23段と第24段で、崩御後しばらく経ってからことが描かれる。

次にそれぞれの内容について考察する。第1群の序文の前半では、5月雨の折、物思いに沈み、昔のことを思い出して、執筆せざるを得ないという様態が書かれている。当時の天候の実態を『殿暦』によって検証し、長雨がなかった事実を述べた上で、小谷野氏は、「この時作者は表現世界に在るのであり、体験的事実といった範疇を超えた仮構に於いて、愁嘆、沈着の内に日を送るという自己の内部状況の指定に向かうのであった。」とする。序文の後半では、8年間の出仕生活で目にした帝の姿、その「めでたき御こと」を回想している。第2群は、本作品の成立事情を考察する上で重要な部分である。長子は堀河天皇を献身的に看護しているが、そうした状況の中で覚書を記す余裕があったとは考えにくい。作者は、覚書によったのではなく、堀河天皇の死を回想の基点として上巻を書き記したのではなからうか。日記中に堀河天皇が自らの病気の回復の見込みがないことを自覚した言葉が見られるが、もし、この作品が覚書によったとするならば、作者は最も敬愛する天皇の不吉な言葉を書きとどめたことになるのであるが、それは想定しがたいことである。

さて、上巻では、堀河天皇のことが中心として描かれるが、「御心のめでたき」「御心のありがたさ」などの表現から、長子が堀河天皇をいかに敬愛しているかが知られるであろう。長子は、愛する天皇が御健康を回復されるように一所懸命に看病し、天皇の病状の変化に伴い彼女の心情も起伏する。しかし、上巻では、中心は作者の心の動きではなく、あくまでも堀河天皇の動静を写しとることである。

さらに上巻で注目すべきことは、作者が脇役、あるいは附随的な人物として登場することである。第3群の内容は、堀河天皇の危篤と崩御の際の、周りの人々の動静であるが、作者の一女官としての視線は、当然史官とは異なるところにそそがれる。長子は、5人だけがいたような書き方をしているが、『中右記』によれば、実際はもっと大勢の人々がいたことがわかる。そこには、自己の不可欠性を示す優越感が反映されているように思われる。そして、大弐三位と藤三位などが泣き乱れる様子を描写したところからもその優越感がほの見え、天皇の崩御を機縁に、幻想の中に「堀河天皇と自己との世界」が構築され始めることとなる。その後の第4群の第23段にある神璽・宝剣の譲渡という公的事件について、作者はそれほど大きな関心を示してはいない。第24段は、美濃の内侍が天皇の思い出を作者に利かせる場面である。堀河天皇が亡くなった後のこの二つの記事には、作者の寂寥感が滲み出ていると言える。

以上は上巻に関する考察であるが、次に下巻の構造と内容について考えてみよう。『讃岐典侍日

記』の下巻は、堀河天皇亡き後の回想記であるので、回想内容、回想の質を中心にしてその構造を検討する必要がある。下巻の世界は、5群に分けることができる。第1群は、第25段から第28段までで、再出仕するまでの迷い、悩みが描かれる。再出仕を徹底的に拒絶するのではなく、自己の再出仕を弁疏しているように読み取れる。第1群をみると、長子は「昔」のことにこだわっているが、堀河天皇を巡る具体的な思い出は見られない。第2群は、第29段から第35段までである。第29段は元日、長子が鳥羽新帝に再出仕し始める日の事を描いたものである。長子は目前の事実を媒介にして堀河天皇のことを回想する。ここでの堀河天皇は静態的であるが、以後、回想は次第に独立性を持ち始め、「作者と堀河天皇との世界」の形式の意図が色濃くなって来ていることは看過できない。第30段は、作者が鳥羽天皇にお食事を差し上げている場面だが、いわゆる「御膝の影」の事が出てくる。ここで回想の独立性がほの見えるが、第31段から第35段まででは、いったんそれはやや退き、作者は再び眼前の事象を昔のそれと比べて記述する傾向を示すに至る。しかし、第2群と第1群との間には相異点が見られる。第1群においては、作者は常に眼前の事象を拒絶し、昔に戻ろうとする気持ちが強く現れているのに対し、第2群においては、「例の作法たがはず」「昔にたがはず」というように、現実の目前の事象を受け入れるようになる。

第3群は、第36段から第48段までである。第36段の泉見物、扇引きの回想では、堀河天皇は健康で悠然とした形姿をもって描出され、作者も天皇の寵愛を受ける妃嬪でもあるかのように登場してくる。そして、ここでは作者の描写の焦点も、堀河天皇から徐々に自己自身の身の上に移されていることがわかる。第39段は、鳥羽天皇が内裏に移る場面である。ここでも例の「御膝のかげ」が出てくる。第45段から第48段までは、作者が堀河天皇と共に臨んだ五節のことが中心に描かれている。五節の回想に登場する作者と堀河天皇の二人は、完全に恋に生きる男女の様相を呈している。泉見物、扇引きの部分がまとまった回想の発端だとすれば、五節の回想は、作者の回想の頂点であり、帝と二人だけの仮構の世界を完成させた部分であると考えられる。上巻には殆ど見られなかった作者と堀河天皇との会話が、ここには記されているのみならず、作者が天皇に甘えたい心の動きや、天皇からは特別な寵愛を受ける様子も描かれる。

第4群は、第49段のみである。ここでは清暑堂の御神樂が行われた様子が描かれるが、回想的なものは一つも見当たらず、回想を中心とする下巻の中では、異質なものと思われる。第5群は、第50段から第55段までである。ここで注目すべきことが二点ある。一つは、堀河天皇に対する追慕の情が薄れていくことに作者が気付いたことである。日記の上・下巻をまとめて世に問うことを決心したのは、この頃であろうか。今一つは読者に了解と共感を求めようとする気持ちが非情に強くあらわれていることである。

#### 第4章 『讃岐典侍日記』の人物像

ここでは上・下巻に共通して登場する4人、それに大臣殿の三位を加え、5人に対象を絞って、その人物像を考察することにする。

まず、大貳三位である。大貳三位とは藤原家範の妻家子のことである。日記には、大貳三位に関する叙述は14箇所あるが、そのうち、上巻は12箇所、下巻は2箇所である。それらを検討すると、大貳三位の描かれ方は、次の4点にまとめることができそうである。その1は、大貳三位は長子に劣らず誠心誠意、堀河天皇を看護していたということである。その2は、堀河天皇が崩御した際の大貳三位の悲痛な様子とその話から、乳母である彼女と天皇との心の交流は、現実の問題としては典侍の長子とは比べものにならないほど深いものがあったと思われることである。その3は、日記の下巻では、大貳三位のことに触れる回想は一つしかないことから、長子の回想内容の取捨選択の基準は大貳三位にではなく、あくまでも堀河天皇にあったことが明らかだということである。その4は、日記中でも、史実と同様、大貳三位の身分・地位が、長子より遥かに高いものとして描かれていることである。

次は、弁三位である。弁三位は大納言藤原公実の妻で、日記に見られる弁三位に関する記事は、上巻1、下巻3の4箇所である。これら4つの記事に見る弁三位は、公的立場にある人物としてのイメージが強い。長子の回想の中に出てこない理由は、堀河天皇を看護していなかったためであろう。

続いて大臣殿の三位についてである。彼女は内大臣雅実の妻で、顕通の母である藤原師子であることが知られている。日記には、大臣殿の三位に関する記事は、8箇所あり、すべて上巻に集中している。これは、偶然ではなく、長子の素材選択の意図を反映したものであると言える。

次に藤三位について考えてみる。通説では長子の年離れた姉であるとされるが、長子が藤三位の養女であるという説もある。藤三位に関する記事は、上巻に6箇所、下巻に5箇所あるが、上・下巻に描かれた藤三位像は同一のものではないと思われる。上巻では、藤三位は堀河天皇との関わりにおいて描かれているが、下巻の藤三位は長子の再出仕の口実の一つとして利用されたり、中宮にほめられたりする際の媒介者としての役割を担わされているにすぎなくなっている。それでも、登場回数からいっても、藤三位は長子にとって大きな存在であったことは否定できない。

日記にあらわれる藤原忠実は、右大臣から関白を経て摂政、太政大臣を歴任し、人臣としては最高位に昇りつめた人である。上巻に13箇所、下巻に10箇所ほどの関連記事があらわれているのは、藤原忠実の地位・身分の高さを反映しているからである。しかし、長子は傍観者の視点で忠実を描いているようである。下巻に登場する忠実は、長子との直接的な関わりがあるし、長子も忠実のことを賛美しているが、長子は、忠実を通して、自分が堀河天皇に特別な待遇を受けていたことを訴える意図をもって記している点も看過できないのである。

## 第5章 『讃岐典侍日記』の表現

### ——上巻を中心として——

『讃岐典侍日記』上巻では、作者はいつも傍観者的位置にいて、事象の進行を眺め、一場面を描き終えると心情や感想を「かなしさぞ、たへがたき」等、分類ができるほどの類型的、類似的表現

で一言付け加えるという型が顕著である。そのため、「直線的、写生的」あるいは「記録的、即物的」表現であるといわれるのも無理はないが、それは作者が意図的に行った表現方法であると考えるのが妥当であろう。その原因は、作者の地位・身分の低さにあるように思われる。上巻は、作者が一女官として天皇の発病から崩御するまでの看取りの記であるので、作者は自らの身分・地位をかたくなに意識せざるをえなかったのである。

さて、次に当事者的視点で描かれた部分についてであるが、その中心は下巻であり、上巻にはそのような場面は極めて少ない。しかし、上巻のそれらの部分においてさえ常に他者より優越した立場にあるかのように描かれている。

ところで、本日記の時間表現についても考察してみる必要がある。上巻では物理的な時間を明示しているのは5例のみである。上巻の時間表現は、作者の内的秩序による時間意識によって改変されたものであることがそれらを分析することによって確認することができた。そして、上・下巻に共通して用いられている朝→昼→夜という時間表現は、自分がいかに献身的に帝を看護しているかを読者に強く印象づけることを意図したものであることを示している。

## 第6章 『讃岐典侍日記』の表現

### ——下巻を中心として——

同語反復の表現は、決して『讃岐典侍日記』に特有のものではない。しかし、同語反復の表現が頻繁にあらわれる15段から18段までは、堀河天皇が病魔に襲われて最も苦しい時期であった。そこで同語反復の表現を用いることによって、天皇の容態を一層鮮明に浮かび上がらせる効果を期待すると同時に、片時も離れずに看護している長子の忠実さも如実に読者に伝えようとする機能を発揮する。下巻にも同語反復の表現が多く見られるが、構文の粗雑さも確かに認められはするもののむしろその背後にある長子の、堀河天皇への追慕の真情を訴える意図をこそ読み取るべきであろう。なお、場面描写の反復も指摘されるが、それが用いられているのは同語反復が頻繁に使われている部分と大体重複していることに注意しておきたい。

次に時間表現について考えてみよう。53段から55段までの章段は別にして、嘉承2年(1107年)10月から翌年の12月までの時間叙述は、全く機械的、物理的意識に基づいており、したがって各々の月が独立した内容をもって、完全な月次の構成のもとに整理されている。15箇月の長い時間にあたって、月を欠くことのない配列法は、下巻の一つの特色と言えるであろう。各時間帯の叙述は、要約すれば、(ア)「眼前の事物に月をつけ」、(イ)「昔と比べ」、(ウ)「回想を行い」、(エ)「現実に戻る」ということになるであろう。

勿論、各時間の叙述には、(ア)~(エ)の要素がすべてそろっているわけではないし、しかも各要素の分量も一様ではないが、各月の記事の基本的な叙述法は、大略上のような方法をとってなされたことは疑いを入れない。

公的行事の記録においては、鳥羽天皇や摂政忠実まで賛美する、客観的な文体の様相を呈してい



るが、断片的な回想の文体の背後には、作者と堀河天皇との親しい関係を認めてほしいという意図が強く働いている。そして、まとまった回想表現の中では、作者が注意深く堀河天皇と自己との愛の構図を創出していることが読み取れる。その描写の文体は、極めて主観的、閉鎖的であって、第三者の介入を許さないものである。

## 第7章 『讃岐典侍日記』下巻五節の一段をめぐる

『讃岐典侍日記』下巻の五節をめぐる記述が、非記録的なものであることは、史料に照合すれば、明白である。そしてまた、それが下巻の記述の約5分の1の分量を占めることと考え併せてみると、五節の一段は作者にとって重要な記事であったことが知られよう。その構造を見てみると、現実から過去の回想へ、そして再び現実へ回帰し、またさらに過去へ遡るといった図式的な様相を示している。そこから長子の、現実から逃避しようとする意図と、どうしても現実を回避し切れないという意識の矛盾と葛藤に満ちた真情が切実に感じられるのである。なお、雪の朝の設定は、王朝びとに定着した雪の美意識と、先行文芸から受け継いだ手法によって描き出されたものであると言えるであろう。それにより、読者である王朝びとは、自然にその記述内容を受け入れることができたであろう。五節の段以降の長子は、周囲の人々以上にその孤独感、悲哀感を深化させて行ったはずである。その孤独感・悲哀感をやわらげようとする長子は「共感」の場を求め、「連帯」への途を探るために、和歌の贈答を始める。日記の末尾の章段に対読者意識が強くあらわれるのも、長子の「共感」や「連帯」の希求のなせるわざであったに違いない。

## 第2篇 『讃岐典侍日記』の諸相

### 第1章 『讃岐典侍日記』における心情語

心情をあらわす語は、作者の心の推移と作品の主題を暗示しやすい。ここでは「あはれ」と「をかし」「かなし」の3つの心情語を取り上げて考察する。

まず、「あはれ」をめぐる主体と客体の人間関係は極めて単純で、天皇（堀河・鳥羽）、女房（作者・常陸殿）、宮中の人（女官）だけに限られる。そしてその行動空間は宮廷だけである。27例のうち、長子が主体である用例は18例にも上っている。鳥羽天皇に寄せた用例は、堀河天皇につぐ8例であるが、大部分は堀河天皇への思い出の媒介としての役割を果たしていることが知られる。そして、長子が堀河天皇に寄せた「あはれ」の内容は、主に追慕の情を訴えるものであった。「をかし」を含む記事は、堀河天皇の長子への愛情の裏付けともなるものである。しかし、「あはれ」と「をかし」との著しい不均衡によって、「みやび」の生活感情の表出までには至っていない。なお、「をかし」の用例が少ないことは、長子が常に対象と一体化してしまっており、客体化・客観化に基づく観照する精神を欠き、〈眺める心〉の欠如に由来するものであると言えるだろう。また、『讃岐典侍日記』中の「あはれ」「をかし」「かなし」の用例の多くは、直接的、間接的に堀河天皇に関連していることから考えると、堀河天皇を描くことが、作者の執筆目的であり、作品の主題だったこ

とを意味する。と同時に、堀河天皇を精確に描くことによって、自分自身の心の所在をも表出することができたのだと思われる。

本日記に見られる心情語は、上の3語のほか、「こころうし」10例、「こころぼそし」2例、「わびし」3例、「わぶ」4例、「はかなし」4例、「くるし」10例、「くるしげなり」11例、「寂しげなり」2例などがあげられる。このような一方的な下降的認識と感情体験は、作者の精神の不安定・不均衡と無縁ではなかったはずである。

## 第2章 『讃岐典侍日記』に描かれた愛と死

池田亀鑑氏が「讃岐典侍日記の著者は、第一に死を見出した人であるといえる」と語って以来、一時、「死の文学」という捉え方を『讃岐典侍日記』の代名詞ともなるほどであったが、「死」は作品全体においてどのような役割を果たしているのか、一方、今井源衛氏が、長子と堀河天皇との関係に男女の情愛関係が認められることを指摘しているが、その男女関係、言わば愛の内実はどのようなものであったのか、それらについて、ここでは一步踏み込んで考察を行った。

『讃岐典侍日記』で最も著名な「御藤のかげ」と呼ばれるエピソードが、上・下巻にわたって三度繰り返し記されていることは、作者自身にとって大きな意味を持ち、作品世界に強い暗示を投げかけていると言えよう。それは、「夔」の世界においてしか存在しえない長子と堀河天皇との愛を示しており、長子が自らの心に深く刻印したものであったからである。

次に、和歌の世界から長子と堀河天皇との恋を考えてみよう。長子の父の藤原顕綱は、『後拾遺集』以下の勅撰集に20余首も入集している当時の代表的歌人の一人であった。兄の有佐は『金葉集』の歌人であり、姉の藤三位兼子は『千載集』の歌人である。そして、長子自身が和歌の教養を十分に身につけていたことは想像に難くない。日記中の贈歌4首、答歌2首は、その裏付けとなろう。しかし、日記中に堀河天皇との和歌の贈答は、具体的には一例も見られない。これは、当時の恋の在り方から考えると、かなり特異なことを言わねばなるまい。二人の恋は「夔」の世界にしか存在しえず、「晴」の場の記述においては、二人の恋愛関係の証拠は見出しがたいのである。

一方、「死」については、堀河天皇崩御の際の大式三位や藤三位などの乳母、女房達の狂乱ぶりに対して、長子は、冷静に天皇の最期の容姿を目に深く刻印しようとして客観的に凝視しており、ここに、天皇に対する愛情、美化、無限の追慕の情を読み取ることができるのである。

総じて言えば、本日記における愛と死は対立するものではない。愛と死が、それぞれ自立的美の世界を形成しながら日記の進行を促すのではなくて、死の場面において愛が甦り、深化し、その愛を契機にして新たな日記の世界の局面が切り開かれていくのである。

## 第3章 『讃岐典侍日記』の対読者意識

冒頭の序文において、日記執筆の動機・意図・目的などを語ることは、日記文芸の通念とされている。本日記の序にあたる部分も例外ではない。これはやはり対読者意識の表出と見てよからう。

しかも、序文と末尾の章段——第52段、54段、55段とが遥かに呼応し、くり返して自己弁疏をおこなっているのは、対読者意識の明確な表出と見るべきである。なお、末尾の第55段では、常陸殿という具体的な人物の設定によって、予想される読者からの強い非難を防ぐ一方、内容の迫真性をも浮かび上がらせることを意図しているようだ。また、読者の同情と理解と共感を求めようとする行文や、自己弁疏・自己宣伝めいた箇所も多い。これらは作者自身が、他見を前提としていたことを示しているのみならず、作者の積極的な公開の意思をさえ読み取ることができるものである。

読者を想定する場合、作者が日記の最初の読者となることは言うまでもない。そして、作者は女房の身分であるから、宮廷内の親しい同僚の女房たちを、その読者層に予定していたとしても、あながち間違いであるとは言えまい。なお、日記を文芸作品として創出した以上、不特定多数の読者にも期待するところがあったであろう。

『讃岐典侍日記』は、同時代の他の女流日記と比べると、そうした読者に強く了解と共感を求めようとするところに特質を見ることができると言えよう。

#### 第4章 『讃岐典侍日記』上・下巻における「われ」の位相

現存する『讃岐典侍日記』の上・下巻の間には、表現や時間構造などに大きな差異が横たわっている。上巻は即物的表現が特徴的であるのに対して、下巻は修飾的雅文が駆使され、故事や古歌からの引用が自立している。これらの相違を、「われ」の位相の相違・変貌に着目しつつ、作者の精神構造を通して究明してみることとする。

上巻の「われ」（長子自身の言動を含む）には次のような特質が見られる。まず、作者自身のことを「われ」と表現する例は、すべて地の文においてであり、会話文で用いられる例は一つもないことがわかる。次に、「われは、ただ」、「われも」、「われ、乳母などのやうに」という言い方が頻繁に用いられていることから、身分的に自分の無力さをも感じる気持ちが読み取れよう。そして、上巻の舞台に登場する長子は、あくまでも数多くの女官・女房の中の一人に過ぎないのであって、極端に言えば、堀河天皇と直接対話する機会にはそれほど恵まれていなかったと言えるかもしれない。このように、上巻に見られる「われ」は、一人の侍女像としての附随的な位置に置かれている。

これに対して、下巻の「われ」の例は、おおよそ次のようにまとめられるであろう。

その1、下巻の長子は、堀河天皇への追慕の真情を他人に汲み取られる共有しうる時にだけ、他者と心を通じ合うことができる。皆と異なった振る舞いをする時の長子は、孤立しており、その悲しさ、寂しさは並々ではない。その2、再出仕をはじめとして、公の命令によって長子の堀河天皇への追慕の情を心の中でゆっくりとあたためることができない例がいくつか見られる。それらの叙述は、運命への不可抗力性を強く訴えている一方、上流貴顕に自分がいかに重視されているかをも強調することになる。その3、堀河天皇との数少ない会話の中で、「われ」が用いられるのは、一例しかない。これは二人の恋の実在性・具体性の希薄なことの証左とも言える。

ともあれ、下巻の「われ」は複雑な位相を呈しているが、まとまった回想の叙述に用いられる

「われ」には、女主人公にも擬定されるべき作者の人物像が描かれている。そして作者の描写の焦点は、堀河天皇から次第に自己自身としての「われ」へと移動していることに気付く。

### 第5章 『讃岐典侍日記』における和歌の役割

本日記に含まれる28首の和歌は、贈答歌11首と独詠歌17首とから成り、更に独詠歌は他作歌7首と自作歌10首とに分けられる。

7首の他作歌の形式は、一つのパターンを示していて、7首とも作者の心情を代弁して表出するのに寄与している。そして、それらの和歌は地の文の流れの中で、不十分な表現を補完する役割を担っている。さらに、和歌に続く地の文は、一つの類型をなしている。そこには、先行歌を引用して、それに重ね合わせつつ自己の心情を表出しようという意図が、明らかに読み取れる。長子は、現実の眼前の事物を媒介にして高揚する堀河天皇への追慕の情を、先行歌によって強制的に表出する。その媒介となったものは、人事・自然・現実の変遷などであった。堀河天皇を失ったことによって、長子には自然を賞美するゆとりは完全になくなっていたと言えよう。他作歌7首はいずれも直接的、間接的に堀河天皇への追慕の情を強述する作用を果たしている。

さて、11首の贈答歌には次のような特色が見られ。本日記の贈答歌からは、恋愛の経緯や様相を知ることができない。そして、贈答歌と地の文との関係は他作歌と地の文との関係と大差ないものと考えてよい。このように、本日記の贈答内は、贈答歌の一般的な機能を十分に果たしていないといわざるをえないが、それは堀河天皇への追慕の真情の表出という点に収斂されて行くからに外ならない。

独詠歌の自作歌の10首は、いずれも目前の景物を媒介にして、堀河天皇との懐かしい昔を偲んだり、天皇への追慕の情などを表出しているのであり、他作歌との大きな違いは見出せない。

以上、28首の和歌が直接・間接に堀河天皇への追慕の情を表出しているが、これは、堀河天皇に対する長子の真情を感じさせると同時に、長子自身の姿を自浮かび上がらせるものであった。それは本日記の意図——堀河天皇の状態を詳細に描くことによって同時に作者自身をも表出する——に直接結びつく機能を果たすものであったのである。

## 結 論

最後に、『土佐日記』から『讃岐典侍日記』に至るまでの展開を辿り、本日記の平安朝女流日記における位相を明らかにする。

「女性仮託」の姿勢で『土佐日記』を書き記した紀貫之は、跋にあたる日記の末尾に「忘れ難く、口惜しきこと多かれど、え尽くさず。とまれかうまれ、疾く破りてむ」という文言を記した。同じように、『蜻蛉日記』上巻の跋にあたる部分にも「あるかなきかのこちするかげろふの日記といふべし」という文章が見られる。ここに両日記の類似性が見られよう。なお、官人の立場を離れて私的情趣を表出するのは、紀貫之の『土佐日記』で創始されたものと言えよう。このような私的

な、自己の心情の表出、述懐の営為が「家の女」の記としての『蜻蛉日記』に受け継がれて行くことになる。

『和泉式部日記』は、『蜻蛉日記』と比較すると、きわめて異質な作品と言ってよいが、いわゆる「超越的視点」という表現方法においては、両作品の間に関連性が認められる。『和泉式部日記』は、『蜻蛉日記』で萌芽に終わった「内面への超越的視点」による表現において大きく成功し、すでに『蜻蛉日記』が克服したはずの「外面への超越的視点」による叙述において挫折した物語的日記とみることができよう。

『更級日記』の冒頭起筆の文章は、『蜻蛉日記』の冒頭序文に精神的に依拠しているとも考えられる。なお、具体的には、孝標女と資通との出会いの場面は、道綱母と遠度との対面の場面に酷似しているなど、『蜻蛉日記』の影響の下に、『更級日記』が形成された事情は推察に難くない。

『紫式部日記』は、記録性の濃厚な作品であるが、個人的な事件、私的感慨も記される。作者は自己の人生も回想し鋭く深い内省と批判を加えつつ、孤独な重い思索に沈んでいく。『紫式部日記』は典型的な「宮仕え女房」の日記であるが、結局は「身の上」に回帰するところは、やはり『蜻蛉日記』以来の女流日記の伝統に通じていると見てよからう。

さて、『讃岐典侍日記』の序の後半の、日記執筆の意図・動機・目的等を語る部分は、『蜻蛉日記』の序文に似ているが、前半の自然描写の背後に作者の人生観照が投影されていることは、むしろ、『和泉式部日記』や『紫式部日記』、『更級日記』に近いと言えよう。そして、対読者意識の強い表現や、読者に了解を求め、共感の輪を広げようとする姿勢、そして、日記執筆終了後、埋めがたい精神的空虚に陥るところなどは、やはり平安朝女流日記の様式から逸脱するものではなかったことを明らかに示していると言えるであろう。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、『讃岐典侍日記』の平安朝後期女流日記としての様式的特質と諸相を、主として成立・方法・主題・構造・人物像・表現及びその基層を成すと考えられる心情語・愛と死・対読者意識・「われ」の位相・和歌の役割などとの関連をとおして総合的に考察したものである。

『讃岐典侍日記』は、さまざまな謎を含んだ作品である。作者・藤原長子がこの日記に託したものはいったい何であったのか。従来、そうした課題の解明を試みた論考も決して少ないわけではない。論者の視線も、究極的にはそこに注がれていることは言うまでもない。

「序論 研究の課題と方法」においては、伝本（諸本）・成立事情・作者・作品内容などに関する従前の研究成果を丹念に整理し、批判的な短評を差し挟むことによって独自の研究史の構築を試みる。史実との対応関係の調査に終始しがちなこれまでの研究の趨勢とは別途に、文芸的日記（日記文芸）と記録的日記（日記）とを峻別し、『讃岐典侍日記』を文芸作品として捉える立場から、

表現論的解釈学の方法を提示するもの、そうした自らの研究史像を踏まえての論者の視線の行方を予示するものであるに違いない。

「第一篇 『讃岐典侍日記』の特質」は、七章から成り、本日記の文芸的特質を多角的に解明する。

「第一章 『讃岐典侍日記』の成立と方法」では、長子による堀河天皇の看取りの記を上巻に、長子が新帝・鳥羽天皇に仕えながら亡き堀河帝への思慕を増幅していく追慕の記を下巻に配して一篇を構成した、と述べる。そこから、日記執筆の契機とともに時期もまたおのずから推定されることになる、とも説く。いずれも、日記文芸の機能のひとつとして自己救済性を指摘する論者の視点に発する見解として注目に値する。「第二章 『讃岐典侍日記』の主題」は、序文と末尾の章段を連動的に捉えることによって、長子によって意図的に企まれた、堀河帝との密室の情愛という架空の世界を語ることにあった、とする。本論文の全体の主旨にもかかわる論者の創見が凝縮的に示された論述であることは言うまでもない。「第三章 『讃岐典侍日記』の構造」では、上巻の世界において脇役的存在だった長子が、下巻の世界に至ると、回想という虚構の装置を用いることによって堀河帝とともに主役に変貌する推移が、その文芸的構造を規制していることを指摘する。「第四章 『讃岐典侍日記』の人物像」では、五人の登場人物の描写をとおして、長子自身の堀河帝との特異な関係性を浮き彫りにする意図の下に造型されたものであることを論証して間然するところがない。「第五章」及び「第六章」は、「『讃岐典侍日記』の表現」の特性を、上巻と下巻についてそれぞれ考察したもので、視点人物や時間表現をも視野に入れながら、「作者が注意深く堀河天皇と自己との愛の構図を創出していく」主観的・閉鎖的表現機構の特質を析出する。そのことは、「第七章 『讃岐典侍日記』下巻五節の一段をめぐって」の表現構造——現実と過去との円環的表現の図式とも補完・照応するものである、と説く。

「第二篇 『讃岐典侍日記』の諸相」は、五章から成り、「第一篇」の基層を成す文芸的内容を鮮明に照射している。

まず、論者は、「作者は自分自身を直接的に描くことよりも、自分の周辺の人物たちを客観的に叙述することによって、かえって自身の姿を鮮烈に描き上げることができたのではなかったろうか」（第一章 『讃岐典侍日記』における心情語）という独自の作業仮説に視座を据える。そして、心情語（第一章）、愛と死（第二章）、対読者意識（第三章）、「われ」の位相（第四章）、和歌の役割（第五章）などの多角的な観点から、相互連関的に自らの仮説の正当性を検証していく。「堀河天皇から特別な寵愛を受けたことを（やや作為的に自己）確認し、そのことを顕示したいと願うところに、日記を書く裏の意図が託されている」（第三章）と読み解く論者は、「現実の生活で天皇からの恩愛をうけることができなくて、死を媒介にして、書くという行為をとおして、はじめて虚像としての愛の対象の措定を達成した」（第四章）長子の人物像と作品のモチーフを明らかにし、彼女の実体験と表現による虚構との亀裂のはざまに作者の真実の女心の所在を確認する。この日記の主題や世界構造も、そのような解釈に基づくことによるのみ、初めて明らかにすることができる、

とも説く。先行の諸説とは、大きな差異を持つ見解であることは言うまでもない。作品の文章表現に執着しつつ、それを丹念に分析し、独創的な解釈を導き出していく論者の方法と論述は、極めて説得力に富む。上述のような結論は、「第一篇」の論旨にも照応して、本日記の様式的徴標を示すものとして見過ごしがたい。

「結論」では、『土佐日記』から『讃岐典侍日記』に至るまでの史的展開を辿り、日記の様式的諸要素を具備しつつも、虚構の愛の世界の演出に成功した女流日記のひとつの達成として『讃岐典侍日記』の定位を試みる。

以上のように、本論文は、『讃岐典侍日記』の虚構の装置と機能に着目することによって、その様式的特質と、死と愛の相関性の架空の構図を多角的・総合的に考察したものである。広く従来の研究史を踏まえ、通行の諸説に疑義を呈しつつ、自らの新見を慎重に導入して、史実との対応・短絡関係を積極的に退ける見解の数々は、高く評価されるべきであろう。

本論文においては、日記の自己救済性と自照性の関係について触れるところがなく、時間表現の解釈に際して、アイオーン・クロノス・カイロスの理論を援用することを避けて日記様式解明への重要な回路を遮断したり、また、序文の構成上の定位についての見解に徹底さを欠くなど、なお若干の課題が今後に残されてはいるものの、いずれも論旨の展開と論述の内容の評価にかかわるほどのものではない。

総じて、本論文は、『讃岐典侍日記』の研究史上に未踏の分野を切り開き、新たな道標を打ち据えて、斯学の水準を高めたものであることは、疑いを入れないところである。

以上の理由によって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。